

コミュニケーション研究の分野において 評価という用語が指示する対象について

関 崎 博 紀

筑波大学人文社会系 助教

本稿では、コミュニケーションの研究において、評価という用語がどのような対象を指すものとして用いられてきたかを概観する。そして、評価に、物事を価値づける行為や活動を指す場合と、発話の機能を認定するための要素の一つとしての評価的態度を指す場合の区別があること、及び、前者には心理的な活動としての評価と、行為としての評価があることを確認する。

キーワード：評価、行為・活動、態度、言語行動、機能

1. はじめに

筆者は、日本語の会話の中で見られる否定的評価という行為を研究している。否定的評価とは、ある人や物事について価値がないとする価値づけのことである。これを研究するのは、対人関係を脅かす否定的評価という行為が敢えて行われる場合に、どのような事柄をよくないと感じるのかという発想やそれをどのように表明するかということに表れる配慮のあり方など、コミュニケーションの進め方に関連する事柄がよく分かるからである。しかし、残念なことに、否定的評価は研究されることが少なく、まだまだ未知の事柄が多い。例えば、日本語では否定的評価が何に対して、何をきっかけに、どのような表現で述べられるのか、そして否定的評価が述べられた後にはどのように対処していくものなのか、などである。研究を進めていくにあたっては、「否定的に」「評価する」とはどういうことなのかということを確認しておく必要がある。特に、「評価する」という用語は、様々な現象を指すものとして用いられているだけに、観点を整理し、研究のスタンスが明確にできるように下地を整えておく必要がある。

そこで本稿では、従来の研究において評価という用語がどのように使われてきたかを整理し、コミュニケーションの研究において評価を捉えるための示唆を得る。

2. 評価という用語

評価という用語は、様々な使われ方をする。言語教育の分野において「評価」というと、テストやクイズ等、学習者の理解度、到達度や特定の群の中での能力的な位置を測定する行為を指す場合が多い。本稿で扱う評価とは、「いい」「悪い」「きれい」「汚い」等、特定の人や物がどのような価値を持っているかを明らかにすることを指す。価値とは何か、価値を判断する基準はどこにあるか、ということについては諸説ある。慣習に適っているものを最適と認めるもの¹⁾や、倫理・道徳に適うものを個人として認めるという考え方などである²⁾。また、価値判断の基準を社

会的な規範に求め、規範から逸脱したものを否定的に評価するという考え方³⁾もある。

コミュニケーションの研究における評価という用語は、大まかに2通りの使われ方をしているようである。1つは、対象を価値づけること自体が目的となっている評価という行為・活動を指す場合である。ここには、心理的な活動としての評価と、行為としての評価を指す場合がある。もう1つは、発話の機能を認定するための要素の一つとしての評価の態度を指す場合である。それぞれの研究において評価の捉え方は少しずつ異なっている。そこで以下、それぞれに位置付けられる研究を概観していく。

2-(1) 行為・活動としての評価

まず、評価という活動を指す場合について述べる。まず心理的な活動としての評価について述べた研究を概観し、次に行為としての評価を分析した研究について示す。

2-(1)-(a) 心理的な活動としての評価

評価という用語は、ある物事の価値を明らかにする心理的な活動を指すものとして用いられる。例えば、樋口(1989)は、評価的な文について、「評価をおこなう主体と評価がむけられる対象とのあいだの、価値的な関係を確認する文である」と規定している⁴⁾。ここでの評価とは、評価の対象となる事柄が評価の主体にとってどのような価値を持っているかを明らかにすることとされる。対象が価値のある、よいものであれば肯定的な関係が、価値のない、悪いものであるならば否定的な関係が確認されることになるとしている。また、樋口(2001)では、評価を、何らかの基準と比較することによって、その物が人間の欲求、利害、目的においてどのような意義を持つのかを明らかにする人間の意識的な活動のことと規定している⁵⁾。何らかの基準というのは、社会・道徳的な規範であることもあれば、個人的な経験や嗜好の場合もある。八亀(2008)も、樋口(2001)の定義を引きながら、評価を、狭く「正しい、よい、悪い」等の形容詞の語彙的な意味素性を指すのではなく、「話し手の主体的な関わりのこと」としている。具体的には、「この部屋広い／狭いね」という場合の「広い」「狭い」は、「この部屋」に備わっている客観的な特徴として差し出される一方で、話し手の中の何らかの基準(それまでの経験や部屋の用途など)と比較して、意味づけている、というように捉えている⁶⁾。

これらの研究では共通して、評価を、単語や文、表現の意味としてではなく、心理的に行われ

1) P・グライス著、清塚邦彦訳『論理と会話』(勁草書房、1998年)、282-285頁。

2) 価値とは何かという問題については、哲学や倫理学の分野においても議論が行われている。C・L・ステューブソン著、島田四郎訳『倫理と言語』(1984年)によれば、「いい」という評価は「わたくしはこれを是認する」という態度を表す確言的言明と、「あなたもそうしなさい」という聞き手の態度を変えたり強めたりするために述べられる命令的言明の2つの言明の和として言い換えることができるとされる。ステューブソンの言う態度とは話し手の心の状態とされており、本研究で概観するところの心理的な活動としての評価に近いものと推察されるが、ステューブソン自身、態度を正確に定義することはしておらず、一般的な用法や「欲望」「願望」「否認」などの言葉によって指示される概念を指すものとして理解するべきと述べるにとどまっている。

3) 室山敏昭『「ヨコ」社会の構造と意味』(和泉書院、2001)。

4) 樋口文彦「評価的な文」『ことばの科学』3(1989年)、181頁。

5) 樋口文彦「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学』10(2001年)、43頁。

6) 八亀裕美『日本語形容詞の記述的研究』(明治書院、2008年)、33-35頁。

る活動として捉えている。この考え方は、次に述べる具体的な行為としての評価と異なっている。

2-(1)-(b) 行為としての評価

評価という用語が特定の行為を指す場合にも用いられることを指摘した研究に、Goodwin & Goodwin(1987)がある。Goodwin & Goodwin(1987)は、会話における言語行動としての評価(assessment)の連鎖を分析しているが、その中で、「評価」という用語は5つの異なるレベルの事象を指すものとして使われていると指摘している⁷⁾。1つ目のレベルは、一連の発話の中の特定の位置に出現する構造的な単位を指す場合である。形容詞の「きれい」などがこれに当たるとしている。2つ目のレベルは、イントネーションや非言語的な手段など、分割できない事象を通して行われる評価を指す場合である。言語を機能的に捉えた場合、行為としての評価は単語や統語のレベルにとどまらず、プロソディーなど統語的単位を超えた次元で行われると述べている。Goodwin & Goodwin(1987)は、会話参加者が評価という行為へ参加していることを示すイントネーションの標識を、assessment signal と呼び、会話の流れの中で評価という行為を区切るのに役立つものとしている。3つ目のレベルは、特定の発話行為(speech act)を指す場合である。これは評価行動(assessment action、本稿筆者訳)と呼ばれる。これにはいくつかの特徴がある。1つは、他の多くの発話行為が1つの完成した文やターンによってなされるのに対して、評価行動は、発話の途中においてなされる点である。また、評価行動の最も決定的な特徴は、評価行動は、行為を行う者が評価対象に対してどのような態度をとっているかを知る手段になっている点である。何かを「きれい」と評価した場合、聞いている側は評価者の評価する能力を判断することができるし、評価者は自身のとった態度に責任を持つことになる。3つ目は、評価行動は、評価者の経験や評価対象に対する感情的な関与を示す点である。感情の表示(affect displays、本稿筆者訳)は、評価の産出において広く見られるばかりでなく、評価行動の構造においても極めて中心的なものとしてされている。「評価」という単語が指す4つ目のレベルは、評価活動(assessment activity、本稿筆者訳)を指す場合である。実際の相互に作用しあう活動の中では、評価行動ばかりではなく、評価に関連する種々の行動が行われ、モニターされている。そこでは会話参加者は、他の参加者の行動や評価活動の構造をモニターしながら、ダイナミックに自身の行動を修正していくとされる。最後に5つ目のレベルとして、「評価可能」(assessable)という単語が挙げられている。これは、評価によって見積もられる(evaluate)物のことを指す。

上に示したように、評価という用語は、価値づけることが目的となっている特定の発話行為を指す場合にも用いられる。さらに、一人の話者による発話行為のみではなく、複数の話者が参加しての活動としての評価を指す場合もあることが分かる。

以上、2-(1)では、行為・活動としての評価を取り上げた。ここには、行為・活動としての評価がどのようにして成立するのか、特にコミュニケーションに従事する者が互いに抱えている価値づけはどのようにして伝達されているのか、という問題が残る。これについては、グライスが論じている⁸⁾。グライスによれば、意味との関連で価値の問いを惹起する問題が二つあるという。一つには、それぞれ語の意味と話し手の意味とでも呼ぶべきものの相互関係に関わるもので、

7) Goodwin, C. and Goodwin, M.H. Concurrent operations on talk: Notes on the interactive organization of assessments. *IPrA papers in pragmatics*, 1(1987), pp. 6-10.

8) P・グライス著、清塚邦彦訳『論理と会話』(勁草書房、1998年)、282-290頁。

ある文が何ごとかを意味するという発言（例：「ジョンは独身者だ」が未婚の男性であることを意味する等）が、何らかの仕方で、その文の特定の使用者が特定の場面で意味する事柄に基づいて理解されるべきだという着想があることが示されている。すなわち、ある語がある言語においてどんな意味を持つかを述べることは、一般にその語がその言語の話し手にとって何を行うのに最適か、話し手がその語をどのように使用すべきかを述べることでありとされる。また、話し手が個々の場面でどのような意図を持つのが正しいか、あるいは最適かを述べることでありとされている。何をもちて最適とするかの説明は多種多様であることが認められつつ、例としては慣習に適合しているか否かという説明が挙げられている。グライスが示したもう一つの問題は、話し手の意味そのものの構造を明らかにする企てと関わるものである。「話し手が自分の言ったものによってある場面でPということの意味する」と言うときに我々が意味しているのは、彼が伝達を行う（あるいはPということを伝達する）上で最適の状態に置かれているということである。また、話し手が無限個の意図を持つ状態は原理的に実現不可能だが、話し手が置かれている状況からして、我々は話し手がこの充足不可能な条件を満たしているとみなして差支えないということである。このようなグライスの説明を援用することで、話し手が抱いた価値や話し手の行った評価行為・活動が伝達され、相互の評価行為も可能になるというように説明ができる。

2- (2) 発話の機能を認定するための一要素としての評価的態度

2- (1)では、評価という用語が、物事を価値づけること自体が目的となっている行為・活動を指すものとして用いられる場合について概観した。一方で、評価という用語は、そのような行為・活動ではなく、発話の機能を認定するための要素の一つとしての評価的な態度を指すものとしても用いられる。以下、まず発話の機能について概観し、続いて、発話の機能を認定するための一要素としての評価的態度とはどのようなことなのかを述べる。

まず、機能という用語について述べる。機能というのは、ある単位がより大きな構造の中で果たす役目について広く用いられる⁹⁾。言語研究において機能という用語は、言語そのものの働きを指す場合や、発話の働きを指す場合、ある言語単位の文中での統語的な振る舞いを指す場合等、様々に用いられてきた。そのうち、ここでは特に評価の発話に関わるものとして、伝達的な機能に絞って概観する。

言語が持つ伝達的な機能について述べた先駆的な研究に、ビューラー(1983、原著 1934)がある。ビューラー(1983)では、言語の3つの機能として、表出、呼びかけ、叙述を挙げた。この考えはJacobson(1960)にも引き継がれており、言語の機能として挙げられた指示的(referential)機能、情動的(emotive)機能、誘導的(conative)機能、交話的(phatic)機能、メタ言語的(metalingual)機能の6つ¹⁰⁾のうち、指示的機能、情動的機能、誘導的機能は、ビューラーの挙げた言語の3つの機能に該当すると述べられている¹¹⁾。

その後、言語の伝達的な機能を、具体的な行為のラベルで記述した研究が見られるようになる。ハリデー(2001、原著 1994)は、発話が持つ基本的な対人機能として「提供(offer)」「命令

9) 中島平三・瀬田幸人監訳『オックスフォード言語学辞典』(朝倉書店、2009年)、71頁。

10) Jacobson(1960)の挙げた言語の機能の訳は、中島・瀬田(2009)に従う。

11) Jacobson, R. Closing statement: Linguistics and Poetics. In T. A. Sebeok (ed.), *Style in Language*. Massachusetts: MIT Press, 1960. p. 355.

(command)」「陳述(statement)」「質問(question)」の4つを挙げた。これは、「与える」「求める」という基本的な発話役割が聞き手と話し手に付与され、双方が「受け取ることを促す」「与えることを促す」という行為を行う、という発想が基盤となっている。そして、交換されるものが品物や行為なのか、情報なのかという点を区別した結果、上記の4つの機能が見出されている。ハリデーが示した発話の対人的機能は、その基盤となる発想を見ても分かるように、言語の機能とは異なり、具体的な行為のラベルで記述されている。外国語教育の分野の「概念を中心とするシラバス(notional syllabuses)」では、発話の機能が行為のラベルによって示されている。「概念を中心とするシラバス」でも、言語を使って何をするかという行為を重視し、その言語が相互作用の一部として持つ働きである「伝達機能」が重視された(ウィルキンズ 1984、原著 1976)。シラバスを構成する概念の中には意味・文法範疇、法的範疇に加えて、「伝達機能の諸範疇」が設けられ、命令や勧誘などの範疇が示されている。伝達機能という名称を用いたのは、命令や勧誘などのラベルで示される各行為が発話行為(speech act)よりも広い働きを果たすことを示すため¹²⁾ということである。

以上に示したように、機能という用語は、様々な概念を指す。そのうち特に発話の伝達的な機能ということに限って言えば、具体的な発話行為のラベルが付与されてきた。しかし、その流れとは異なり、日本語の発話の研究においては、発話の機能は、具体的な行為のラベルによって表すのではなく、多角的に見た特徴の総体として認定すべきだとする考え方がある。国立国語研究所(1987)は、「日本語教育映画基礎編」の中に見られる発話について、その機能の分析を試みている。分析のカテゴリーとして、文末の要素、場面を形成する要因(発話の動機、働きかけの種類、発話内容に対する態度)とその下位区分を詳細に設けている。この分析方法では、「命令」「勧誘」などの行為を表すラベルは、文末の表現意図による分類の下位項目として挙げられているものの、それのみによって発話の機能を表す立場はとっていない。また、この分析方法において評価に関する分類項目は、発話内容に対する態度として、中立的／肯定的評価／否定的評価が設けられている。つまり、ここでの評価という用語は、ある発話を持つ対人的な機能としてではなく、発話の機能を捉える際の一つの観点としての話者の態度を指している。機能を捉える際に文中の要素と場面を形成する要因を分析しているのは、文と文脈の関係を捉えるためであると説明されている¹³⁾。発話の機能を捉える際に多様な観点を設定するという手法は、熊谷(1997)にも引き継がれている。熊谷(1997)は、発話の機能を認定するための12の観点を設け、発話の機能をそれらの特徴の束として捉えることを提案している。多様な観点から発話の機能を認定することを試みているのは、発話の機能として「非難」や「不平」のような言語行為のラベルを貼ることに問題点があるからだとして述べている。その問題点とは、発話の機能を一面的にしか明らかにできないことと、そのラベルは異なる文化や社会において必ずしも同じ内容や意味合いを持たないために、意味のずれや誤解のもとになる可能性があることである¹⁴⁾。熊谷(1997)で提案されている12の観点とは、発話の内容や姿勢として、①行為的機能、②相手への働きかけの姿勢、③話題・内容に対する話し手の評価・態度、④同調性、話し手と相手及び両者の関係として、⑤話し手の種

12) D・A・ウィルキンズ、島岡丘訳注『ノーションナルシラバス』(桐原書店、1984年)、50頁。

13) 国立国語研究所『日本語教育映画基礎編 総合文型表』(国立国語研究所、1987年)、154頁。

14) 熊谷智子「はたらきかけのやりとりとしての会話—特徴の束という形でみた「発話機能」—」、茂呂雄二編『対話と知』(新曜社、1997年)、22頁。

類、⑥発話の受け手の種類、⑦話し手と相手との力関係への影響、⑧話し手と相手との親疎関係への影響、会話の流れの構成として、⑨発話のきっかけ、⑩発話のうけわたし、⑪発話のうけつぎ、⑫談話構成上のはたらき、である。このうち、評価に関わる項目には、③の項目に設けられた肯定的／否定的という分類と、②の下位項目として設けられている評価表明的という分類が見られる。ここでも評価という用語は、ある発話を持つ対人的な機能を指すものとしては用いられておらず、発話の機能を捉える際の一つの観点としての話者の態度と、相手への働きかけの姿勢を指している。

評価という用語の用いられ方に戻る。ウィルキンズ(1984)の見方に則せば、評価とは、ある発話の機能を表すラベルとなりうるものとして捉えられる¹⁵⁾。しかし、日本語研究の分野で行われてきた発話の研究を概観して分かったように、評価という用語は、行為を指すものではなく、発話に込められた話者の態度や働きかけの姿勢を指すものとしても用いられる場合がある。ここでの評価とは、具体的には、肯定的評価／否定的評価（／中立的）の態度のいずれかであって、「広い／狭い」や「好きだ／嫌いだ」というようなある基準から見て物事を具体的に特徴づける行為とは異なる。互いの違いを浮き立たせるために、双方の立場から評価という概念を表してみる。発話の機能を多角的に認定する立場からは、安易なラベル付けは避けなければいけないが、敢えて行うとすれば、評価とは、不満表明や不同意などの行為に共通して認められる要素、とでも言うことができよう。逆に、多様な特徴の束として発話の機能としての否定的評価を認定するとすれば、行為的機能が「陳述・表出」で、働きかけの姿勢が「評価表明的」なもので、内容に対する話し手の評価が「否定的」な発話で…、というように表すことができるであろう。そして各分類における項目の組み合わせの異なりが、いわゆる不満表明や不同意など他の機能との区別になる、というように考えることができる。

3. まとめ

本稿では、評価という用語が、様々な事象を指すものとして用いられていることを見てきた。評価に関連する研究を行う際には、当該研究の対象がどの概念に当たるのかの区別を明確にしておく必要がある。そのうえで、評価、肯定的評価、否定的評価に関する研究が積み重ねることが望まれる。

参考文献：

- D・A・ウィルキンズ、島岡丘訳注『ノーショナルシラバス』（桐原書店、1984年）。(Wilkins, D. A. *Notional Syllabuses*. Oxford University Press, 1976.)
熊谷智子「はたらきかけのやりとりとしての会話—特徴の束という形でみた「発話機能」—」、茂呂雄二編『対話と知』（新曜社、1997年）、21-46頁。
P・グライス、清塚邦彦訳『論理と会話』（勁草書房、1998年）。(Grice, P. *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press, 1989.)
国立国語研究所『日本語教育映画基礎編 総合文型表』（国立国語研究所、1987年）。

15) 実際には、ウィルキンズ(1984)において「話し手の意図や見解の表明」というラベルによって表される機能に相当すると考えられる。

- C・L・ステイーブンソン、島田四郎訳『倫理と言語 増訂版』（内田老鶴圃、1984年）。
（Stevenson, C. L. *Ethics and Language*. 6th edition. Yale University Press, 1953）
- 中島平三・瀬田幸人監訳『オックスフォード言語学辞典』（朝倉書店、2009年）。
- M. A. K・ハリデー、山口登・笈壽雄訳『機能文法概説』（くろしお出版、2001年）。（Halliday, M. A. K. *An Introduction to Functional Grammar*. Second edition. Edward Arnold Publishers Limited, 1994.）
- 樋口文彦「評価的な文」『ことばの科学』3（1989年）、181-192頁。
- 樋口文彦「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学』10（2001年）、43-66頁。
- K・ビューラー、脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子訳『言語理論』（クロノス、1983年）。
（Buhler, K. 1934. *Sprachtheorie*. G. Fischer Verlag.）
- 室山敏昭『「ヨコ」社会の構造と意味』（和泉書院、2001）。
- 八亀裕美『日本語形容詞の記述的研究』（明治書院、2008年）。
- Goodwin, C. and Goodwin, M. H. Concurrent operations on talk: Notes on the interactive organization of assessments. *IPrA papers in pragmatics*, 1 (1987), pp. 1-54.
- Jacobson, R. Closing statement: Linguistics and Poetics. In T. A. Sebeok (ed.), *Style in Language*. Massachusetts: MIT Press, 1960. pp. 351-377.